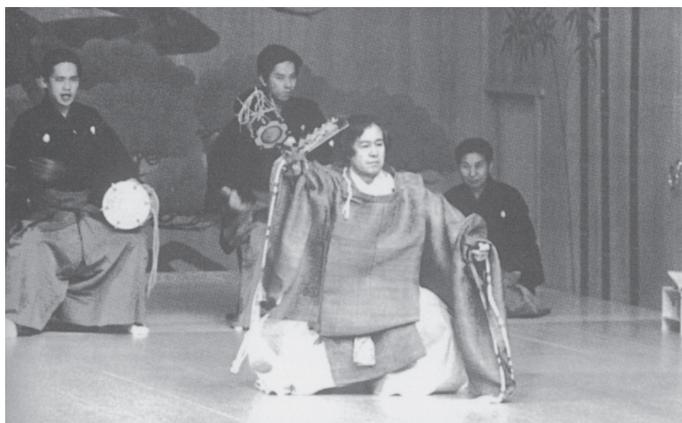


能 ハムレット

「生か死か、それが問題か。
生死はもはや問ふまでもなし」



『英語能 ハムレット』(シテ・宗片邦義)、国立能楽堂、1985年。Photo:Tatsuo Yoshikoshi

1982年初演の『英語能ハムレット』(シテ・宗片邦義)は、1985年に国立能楽堂で再演され、それを基に日本最初の日本語『能ハムレット』が梅若研能会により2004年にカザルスホールで公演されている。主催日本大学。(99ページ、註参照)。それは夏目漱石が坪内逍遙訳・演出の「ハムレット」を批判し、シェイクスピア劇独特の詩をいかすために、「能・謡曲という別格の音調を持つ象徴劇」への翻案を提唱してから一世紀。初の「能ハムレット」上演であった。

能　　ハムレット

〔構想〕 シェイクスピア劇を代表する悲劇『ハムレット』。デンマーク王子ハムレットの遺言により、親友ホレイシオが殿下の生涯を物語る。

所、デンマーク

時、十六世紀

曲柄、夢幻能風、二・四番目（所要時間約一時間）

人物

シテ……………ハムレット（デンマーク王子。先王ノ息子。現王ノ甥）

ツレ……………オフィーリア（ハムレットノ恋人。宮内大臣ノ娘）ノ亡霊

ワキ……………ホレイシオ（ハムレットノ親友、学者。今ハ旅僧）

間（イ）狂言……………墓守

地謡（三・四名）。囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓、尺八）

前場

〔ワキ（ホレイシオ）登場〕

ワキ 名ノリ・詞・確リ

「これはデンマーク王子ハムレット殿下の友人にて、ホレイシオと申すなり。さてもハムレット、殿下には。不慮の、出来事により。御年三十歳にて、お亡くなりになられたり。その、今際の際に。ホレイシオよ。吾が生涯の真実を、後の世に伝へよと。されば我は、旅僧となり。国々を巡り殿下の生涯を、語り伝へるなり

カエテ

「ご覧なされ。殿下のお姿が、彼方に見えてまいりました

〔ホレイシオ、ワキ座へ〕

〔後見、舞台正先ニ小袖ヲ伸ベル。〕

〔二声〕

〔ハムレット橋掛リニ現レル。〕

二ノ松辺リデ

一セイヨワ・スラリ
シテ

「生か死か。生くるか死ぬるかこの命。生死の道に迷ふなり

(To be, or not to be, that is the question.)

サシ・不合

「いずれか気高き心なる。残忍非道の運命に耐へて生き抜くや。または苦難の海に立ち向かひ。その息の根をとどめんか」

下歌・合・ヨワ

「死ぬるとは。心の悩みも肉体の。患ひもすべて断ち切れる。この上もなき最期なれ」

〔舞台ニ入り〕

クドキ・閑カニ

「死ぬるとは。まことすべての終わりなるや。眠りの如きものなるや。眠れば夢を見るものを。如何なる夢を見るやらん。」

(To die, to sleep; / To sleep: perchance to dream: ay, there's the rub; / For in that sleep of death what dreams may come.)

地謡ウケテ「旅人たびびと帰らぬ国こがへなれば。思ひ迷へば優柔不断ゆうじゅうふだんか。乾坤一擲けんこんいちじく。実行の名じやうぎやうを失うしなへり」

(Thus conscience does make cowards of us all; / And lose the name of action.)

〔シテ正先ノ小袖ニ気付ク〕

クリ

シテ「あれなるは。わがオフィーリアの埋葬まいそうにてはなきや」

サシ・ヨワ

地「恋人こいびとの。思ひも寄らぬ野辺のべ送り。デンマーク王子ハムレット。宰相ポローニアス殺害

の廉かたじけなくにより。イングランドへ島流しまながし。海賊船かいぞくせんに飛び乗りて。帰りてみれば恋人の。思

シテ ひと寄らぬ野辺送り。「シテ、小袖前」墓穴に飛び込み彼の女をかき抱かんとせるほどに。兄レアーティーズに遮られ。王には狂氣と罵られ。遠ざけられし悔しさよ

シテ 「四万人の兄よりも。なほ我が愛は勝れるを」

「オフィーリアノ墓前ニ慟哭（シオリ）、坐禪、黙想」

クセ合ッヨ
地

「その後墓所に戻り来て。墓前に坐して思ふやふ。我は父。ハムレット王を敬ひし。その亡霊や現れて。いま王冠をいだく者に。命と共に。王冠も王妃も奪はる。復讐せよと命ぜらる。われは復讐を厭へども。父国王の嚴命なりせば」

一セイ引立テ
シテ

「忌まはしや。この世の關節外れたる。それ立て直す。わが運命なりや」
(The time is out of joint. O cursed spite, / That ever I was born to set it right.)

ウケテ確リ
地

「されば命を懸けんとして。想ひ人オフィーリアには」

シテ

「君。尼寺へ。尼寺へ行き給へ」

(To a nunnery, go.)

クドキッヨ
地

「そは。清らに生きよの謂ひなりし。(間)さてその後。王妃の寢室の。壁掛に隠れし者あり。さてはと思ひ突き刺し見れば。王にはあらで。哀れ。そは宮内大臣。オフィーリアの父なりき」
「かくてハムレット。イングラントへ島流し。父を失ひ。恋人失ひ」

不合ヨワ

シテ

しオフィーリア。孤独に耐へかね。狂気となりて。水面に身を。投げたりや

「哀れオフィーリア。許し給へ 地」許し給へや

「恋ノ音取」風ノ笛アリ。橋掛リニ、

オフィーリアノ亡霊現ワル。ハムレットニ近ヅキ、

シバシ右手差シ伸べ、ヤガテ消エル。

ハムレット、居立チ、扇抜キ持チ、舞ウ」

(能『山姥』キリノ如キ)「悟リノ舞」(Dance of Enlightenment)

ノル・ツヨ・確リ

シテ

「生死はもはや。問ふまでもなし 地」生死はもはや問ふまでもなし

(To be or not to be is no longer the question.)

確リ

シテ

「生あるすべては往くべき運命 地」早きか晚きか (If it be not now, yet it will come.)

確リ

シテ

「さればいま 地」さればいま シテ「いまこの時に命懸くべし 地」この時に命

懸くべし。覚悟がすべて。覚悟こそはすべてなれ (The readiness is all.)

「三ノ松マデ走り詰メ、小回り開キ、入ル」

〔中人〕

間狂言(慕守。謡イナガラ登場)

「若い頃には恋もした。甘いあまい恋もした。

とろけるような恋もした。年はとつても気持ちはいつも青海原。

生きることは選ぶこと。この世の醍醐味わかってきたぞ。

「この世にや一つも偶然はなし。すべて因果はあるものよ。

(There is no co-incidence in this world. / Everything has cause and effect.)

生きることは選ぶこと。この世もあの世もほんとのいのち。

宇宙の命につながること。この世の醍醐味わかってきたぞ。

(To live is to choose. / Connect your life to the life of the Universe. / This life and life-after are both real lives. / Now I know the secrets of this life.) (K.M.)

「この辺りの慕守でござる。長い間慕守をして参ったが、思へば三十数年前の事でござった。宮内大臣ポローニアス閣下のご息女、オフィーリア様の簡素な野辺送りがござる。

た。実はハムレット殿下がその後お忍びにて再び詣でられたのでござる。これ存じ上げるはそれがし一人なれば。それをわが胸に収めおくも落ち着かず。物語り致したく存ずる。

野辺送りのありし翌日のこと。殿下と思しきお姿がオフィーリア様の墓前に見えられた。墓前にお座りになりひと時瞑想なされ。時折お涙を流された。その時どこからともなくオフィーリア様とおぼしきお姿が現れて。静かに殿下に近づかれ。背後より右手をかざし。殿下を祝福しておられる如くでござった。やがてそのお姿は消えて。殿下もお帰りになられたのでござる。

これはいかなることとも、墓守のそれがしは存じませぬが。それがし一人の見守りたることなれば。御物語り申し上げたる次第にござる。

レアーティーズ様とフェンシングの試合をなされ。御いのちを落とされたのは。その翌日の事でござりました。

「この世にゃ一つも偶然はなし。すべて因果はあるものよ。」

生きることは選ぶこと。この世もあの世もほんとのいのち。

宇宙の命につながることよ。この世の醍醐味わかってきたさ

〔入ル〕

後場

〔ワキ（ホレイシオ）登場〕

ワキ

詞
確り

「さても、ハムレット殿下には。イングランドへの島流しより、帰られたれば。国王より、レアーティーズ殿との。フェンシングの試合を、申し込まれたり。殿下はその時、胸騒ぎを覚えられたれば。

(How ill's here about my heart.)

我はその時、さればお断わりすべしと進言せるも。殿下は、かかる前兆に挑戦す。雀が一羽空から落つるも、神の摂理おぼしめと思召され。かくて試合に、臨まれたり。されどかのとき殿下を、さらに制せざりしは。ホレイシオ一生の、不覚ふかくなりし。殿下のお言葉「この、天地の間には。学者の思ひ及ばぬこと、多かるべし。」思ひ出ださるるなり

(There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy.)

見よ。かなたに殿下のお姿が、見えてまいりました

「ワキ座へ」

「ハムレット、一人登場。」

サシ・不合・ツヨ
地

「試合に先立ちハムレット。おのが過ち詫びたりけり。されど相手は。父を殺され。妹を失ひたるレアーティーズ。正に仇討。真剣勝負の形相なり

「囃子、斬組（カケリ）。ハムレット、独り舞。

ヤガテ囃子抑エ」

修羅ノリ・ツヨ

「されど一本二本目も。ハムレット獲りたれば。王は祝杯あげよとて。盃に真珠を入れて勧めたり。殿下これをシテ「もう一勝負。地」と断れば。（間）王妃代りにこれを飲む。さて三本目は引き分けたれば。レアーティーズ。休むハムレットの背後に近づき。その腕を刺したりけり。血を見て殿下はシテ「これ裏切りぞ。地」と。

相手の剣を叩き落とし。見れば真剣。すかさずこれにて相手を刺せば。王妃も倒れ。

かの祝杯は。毒杯なりきと知られたり。 「囃子十分抑エ」

地

「ここに至りてレアーティーズ。すべて白状。剣は毒剣。共に命なし。張本人は王なりと。

平ノリニモドシ

これ聞きたるハムレット。かの毒劍もて王を刺し。残る毒杯飲ませたり 「囉子止ム」
「かくて殿下は期せずして。かくて殿下は期せずして。父王の命を達したる

引立テ

シテ 「これ。わが運命なりしや

合ツヨ

地

「偶々なるや。ノルウェイ王子フォータインブラス。この惨劇に遭遇し。ハムレットよ
りの遺言に。デンマーク王位を繼承す。されば哀悼の心もて。ハムレットを称へたり
「時得たりせば。世にも稀なる理想の王者たりしを
(He was likely to have proved most royal.)

不合・ヨツ

キリ 「舞」(能『江口』キリノ如キ) (Dance of Ascension)

ノル・ヨワ・シンミリ

シテ

「赦し給へや

地

「許し合ひなん今際のときぞ

(Exchange forgiveness.)

シテ

「哀れ妃よ。われも往かなむ

地

「この世は永久のものならず。生あるすべては

(All that lives must die, / Passing through nature to eternity.)

関カニ

シテ

「時あらばさらに語らんを。今はこれまで

(Let it be.)

乗ラス関カニ

地

「命をかけし。唯一の世とて

シテ

「天よわれを解き放し給へ

地

「永遠の国へ

「ホレイシオニ」

シテ「君非情の世に生き永らへ。わが物語を後の世に。あとは静寂

(And in this harsh world draw thy breath in
pain. / To tell my story. The rest is silence.)

「尺八（明暗流）入ル」

ワキ（ホレ）「氣高けだかき心が飛び立たる。さらばお休うるわみ麗し王子よ

地「氣高けだかき心が飛び立たる。さらばお休うるわみ麗し王子よ

(Now cracks a noble heart.
Good night, sweet prince.)

聞こえきたるや天使の歌声。見えたりしや天使の御迎へ。

「シテ、橋掛り。ツمامミ扇。次第二高ク」

天使の飛翔ひしょうと歌声に。天使の飛翔と歌声に。誘いざなはれ導みちびかれて。誘はれ導かれて。安息あんそく

世界へ往ゆき給へ。安息世界に入り給ふ (And flights of angels sing thee to thy rest)

註。本作は、一九八五年「能シエクスペリア研究会」公演の英語能『ハムレット』（二場構成、シテ宗片、

国立能楽堂）を基に、新たに「現代能」として制作したものである。なお、二〇〇四年の梅若研究会による日本語初演「能ハムレット」は、詞章・演出その他、問狂言以外はこれとはかなり異なるもので、（演出 観世栄夫・梅若万三郎・宗片邦義、シテ 伊藤嘉章、ツレ 長谷川晴彦、ワキ 加藤眞悟、問狂言 野村万作、地頭 青木一郎、カザルスホール）それは既に学会誌『融合文化研究』第5号、2005に、台本批評等掲載されている。（「国際融合文化学会」HP参照）。

本作との大きな違いは、本作はハムレットの昇天に終わるのに対し、後場にハムレットの霊が登場しワキ（ホレイシヨ）と問答。「われ生死の海を越えすぎて。光の国に至りつつ。真の愛を悟り得たり」と謳い、さらに地謡に、「今みな人は世界の市民。広きまなざし。たかきこころ。幸せにまさるものなし。諸人の寿福増長。仮齡延年」と謡わせたことである。

批評。（『英語能ハムレット』初演一九八二年以降を含む）

* 一部抜粋、要約あり

◇『能ハムレット』は坪内逍遙がシエクスペリア史劇を歌舞伎に生かした『桐一葉』、黒澤明が『マクベス』に基づいて映画化した『蜘蛛巣城』に続いて、日本人がシエクスペリアを使って独自の新しいドラマを創造した画期的な公演であった」（荒井良雄 1982 学習院大学教授、駒澤大学名誉教授、シエクスペリア研究者・役者・朗読家）

◇ 「先生の『能ハムレット』をはじめとする英語能や作・演出の能は日本の演劇史や英学史の中で光っているばかりか、国際的にも広がりが大きく、日本文化の誇りです」(同 2011)

◇ 「オフィーリアの亡骸を表象する小袖の前に、ハムレットは坐禅のポーズで長い「黙想」に入る。囃子は笛のみ。しばしあって背後の塚から白装束のオフィーリアが現れ、黙想するハムレットの後に寄り添う。笛が止み、悟りの瞬間、作者は『ハムレット』の最も有名な一行を書き変える。シェイクスピア劇の激しい動きが極度に切りつめられ、饒舌の劇が沈黙の劇へと凝集された『能・ハムレット』の最も象徴的な場面がこの「黙想」であり、西洋と東洋が切り結ぶのを外国人観客が集約的に経験したのもこの場面であつたらう」(岡本靖正 1983 東京学芸大学名誉教授・元学長。シェイクスピア研究家)

◇ 「上田(宗片) 邦義のシェイクスピア能は禅の芸術であり、日本仏教の千数百年の歴史の中にある。その核心は自己と他者の救済にあり、人間の根元的苦悩も解決にある」(川田基生 2005 博士(総合社会文化)「シェイクスピア能研究」)

◇ 「作者の初演台本初稿(『融合文化研究』第四号)では、霊となったハムレットはオフィーリアへの愛を悟るとともに、次のせりふで人類最大の問題を伝えている。「己が自由や権利の主張。幸福追求競い合うは。いまだ進化の過程なり。これ即ち人類進化の証なり。全人類の共生にこそ燃ゆるなれ」と。

復讐という争い合いによって、運命を翻弄されたハムレットとオフィーリアであるからこそ、最大の問題は「人類の共生」だということを悟り、わたしたちに示すことが出来たのである。日本語『能・ハムレット』は、本当の愛のあり方と、生と死の意味合い、それを通して、わたしたち人類には何が必要なかを示しているといえる」（川原有加 2005 日本大学大学院生）

◇ 「オフィーリアの死をあのようにとらえたハムレットは未だ曾て上演されたことはないでしょうし、あのように人生をとらえたハムレットも上演されたためしはないのではないのでしょうか。私には彼のハムレットの方がシェイクスピアの描いたハムレットより人間としてははるかに素晴らしいハムレットだったように思われました」（ホセ・シバサキ 1985 詩人、日本翻訳詩人協会会長）

◇ 「死後のオフィーリアがハムレットと対面する場面は原作にはない。この場面は作者の主張である。このオフィーリアの姿は作者の心に現れた姿であり、この心に浮かぶオフィーリアを観客が共有するのは夢幻能の特徴である」（杉澤陽子 2005 観世流能楽師）

◇ 「ハムレットは、『生か、死か』と悩み続けた末に『もはやそれは最大の問題ではない』と悟る。ここに宗片ハムレットの獨創性が遺憾なく発揮されている。この一行だけの書き換えによって、シェイクスピアの『ハムレット』は『能・ハムレット』になったのである。私はこの公演を観て〈能の演劇化〉と〈シェイクスピア劇の幽玄化〉という相反する二つの要素が、違和感なく調和結合されているよう

に思えた。この公演に二十一世紀の日本演劇のあるべき将来の姿を見た」(平辰彦 1983 博士(文学)「シェイクスピア劇における幽霊研究」)

◇「迷いの言葉を悟りの言葉に変える。愛人の死を知ったあと、生死を超越して自己の運命を享受する覚悟のキーワードに変えた。これは賢明な決断だった。シェイクスピアを能の世界観に取り込むための新しい創造である」(鳴海四郎 1987 英米演劇研究家、翻訳家)

◇「狂言の中に、優しさ、柔らかさを望んでいる自分としては老墓守の役は面白く巧ましい役どころであった」(野村万作 重要無形文化財保持者・人間国宝、能楽師)

◇「ハムレットが能の形式に見事に生かされ、沈黙の時間によっていっそう意味深くなったことを感じ取りました」(福田陸太郎 1983 東京教育大学名誉教授、比較文学研究家・詩人)

◇「再演を見て、初演の五場物を一応二場物に集約し、時間も前後で七十分になったのは見事である。シテ一人に凝集した演出構成で効果を上げ得た。後場で、相手のレアティーズは地謡座でセリフだけ、結局試合はシテ一人の型で十分効果を挙げた。エピソード、ハムレットの救いの舞、キリの節付けは『江口』のキリ」(山崎有一郎 1985 二十世紀代表的能楽評論家、横浜能楽堂館長)

◇「ノット一語を入れることでハムレット劇のその個所は全く意味が逆転してしまう。この大冒険の創作に対し欧米公演での観客の反応は大拍手であったという。その話を宗片教授の教え子から聞いて、一瞬は驚いたものの、すぐにさもありなんとも思った。この一文字の意味するものは自然観、または死生観即ち世界像の根本的な変化を示唆している。キリスト教風な価値観の深化をみてとれる。時代意識のその深層で変わりつつあるとみてよい」(天邪鬼『宗教新聞』 1987)

◇「あの長い瞑想シーン、あの信じ難い静寂、あれは私たちには思いもつかないことです。ハムレットの苦悩やディレンマの表現としてまったく適切でした。あのシーンだけ取り出してみても、感動的ですよ。この劇は創作であり、「能・ハムレット」だということです。英国で見られるどんなものとも全く違ってはいるんです。極めて日本的なもので、そこが大変魅力的です。目の肥えた観客なら、きっと魅了されるでしょうね。私たちの上演の際にも、能の手法を生かして上演できるだろうと思います」(ジョン・フレイザー John Fraser 1982 英国俳優、「ロンドン・シェイクスピア・グループ」代表)

◇「我が国のハムレット王子が日本の能でどのように演じられるか、(コペンハーゲン公演に)不安を抱いて参りましたが、ローレンス・オリヴィエの映画以来の感動でした。同伴した女性は「目が開かれた」(opened)とのことです」(ジェスパー・ケラー Jesper Keller 1990 デンマーク日本協会)

◇『英語能ハムレット』の中で唯一日本語で語られた「思へば仮の宿」（江口）は、キリで語られたハムレット王妃の「この世から永遠の世へ移るのです」に通じるもので、能と『ハムレット』との見事な融合であった。そして最後の数瞬間は、超絶的（トランセンデンタル）ともいふべき美しさで、「幽玄」を創造して見せたと言っている（下ナルド・リッチー Donald Richie 『ジャパン・タイムズ』1985）

宗片邦義の『英語能ハムレット』

——「生死はもはや問題ではない」

神戸大学教授、シェイクスピア研究家 芦津かおり

（編註）これは、芦津かおり著『股倉からみる「ハムレット」』（京都大学学術出版会、二〇二〇）第7章で、『能ハムレット』の「創造と破壊」「実験的精神」につき、三〇ページにわたる論じられているものを、要約・一部抜粋したものです。一九一一年に主張された夏目漱石の想いが、宗片邦義により初めて実現されたことが指摘されています。

宗片の『能ハムレット』翻案は、二重の意味で漱石の教えに忠実である。悲劇『ハムレット』の最も重要な独白の主要部分“ To be or not to be, that is the question ”を「股倉から」さかさ読みして新たな解釈を生み出している点。また夏目漱石が劇評にて主張した、「沙翁劇は、能とか謡とかのような別格の音調によつて初めて、興味を支持さるべきである」（『東京朝日新聞』）をも実践に移した点である。シェイクスピア劇を能に翻案する——一九二一年に漱石が出したこの提案は、実現までに長い年月を要したのみならず、演劇伝統の融合・混濁のはらむ可能性と困難を露わにするものでもあった。（中略）

宗片は「西洋と東洋、二つの文化が生んだ芸術の魂を融合し、そこから何か新たな芸術作品を創造」し、さらには、「能の中にある悟り、救いの精神をシェイクスピア詩劇の中にとけ込ませたいという願望」を抱きながら、数十年にわたつてこの作業にとり組んできた。彼は黒沢や蜷川のような能の利用法が「能的な雰囲気」を作るための「部分的で技術的」なものに過ぎないことを指摘し、世阿弥が能の本質と考えた語と舞による全体的な統一がないことを批判する。（中略）

宗片はオフィーリアの死を認識することが、ハムレットにとっては決定的な体験であると解釈し、それをドラマの「本質」として抽出した。宗片にとつてドラマの「核」は、オフィーリアの死との対峙を契機とする主人公の悟りであった。だからこそ彼は、二幕物に切り詰める段

階で、五幕物に登場させた二種の亡霊（父王とオフィーリア）のうち前者を捨て、後者のみを保持し、これを独演版に改訂するにあたっては、舞台上に小袖を置くという能のコンベンションを採用し、オフィーリアの霊がハムレットに働きかけて悟りへ導くことを象徴的に示した。（中略）多くの出版物やインタビューなどで宗片は、（やや申し訳なさそうに）自らの「不遜」な書き換えについて何度も口にする。

「私は不遜を承知で、シェイクスピアの最も有名なセリフを否定したのである。ハムレットを能風に演じはじめて今年で八年、この研究は私に、何かを真に理解し、真に愛するためには、それを受け入れ理解した上で『乗り越える』必要があることを教えてくれたらしい。」

崇拜するがゆえに「何かを乗り越える」必要があるという、この逆説的な表現のなかには、フィシユリン&フォォーティアが「キャンノンに対する複雑で両義的な関係性」と呼ぶところのものが見てとれよう。